

最近[◇]は、昔に比べ障害者スポーツへの注目度がかなり高まっています。先日[※]もパラスリートを養成する大学が出てきていることが新聞記事になっていました。いまは誰もがオリンピックの後はパラリンピックが開催[※]されることを知っています。一九六〇年代、私が小学生の頃^頃、少なくともテレビでパラリンピックの報道はなかったと記憶[※]しています。

1 最近なぜ注目されるのでしょうか。やはり日本人選手の活躍[※]が最大の原因でしょう。でもマスコミの報道などを見て、私は、最近このスポーツへの注目^Aの質が変わってきているのではと思っています。

一枚のスキー板に乗り、急な斜面^{斜面}を猛スピードで滑走^{滑走}するスキー選手。上半身の①キンリョクをフルに使い、疾走^{疾走}する車いすマラソン。見事に車いすを操りながら、相手が返せないところへボールを打つ車いすテニスの選手。車いすごと激しくぶつかりボールを奪^奪いあう格闘技のような車いすバスケット、等々。テレビなどを通して、障害者がスポーツする姿が流されるようになり、彼らが熱中している姿や本気度、競技そしてスポーツとしての洗練度に私たちは、改めて驚き、感動しているのではないのでしょうか。

なぜ驚き、感動するのでしょうか。

多様な障害があるにもかかわらず、それを克服^{克服}し、自らの肉体や精神を磨きあげ、スポーツのルールを遵守[※]し、そのなかでより高みへと向かう障害ある人々の規律ある姿にひととしての美しさを感じ取り、私たちは感動しているのでしょうか。こうした感動が、通常のスポーツアスリートの姿への感動とまったく同じ情緒^{情緒}に②由来しているのか、③そうでないのかを④ケントウすることは、障害者の問題を考えるうえで、とても重要だと思います。ただ、ここでは、ちょっと別の視角から障害者スポーツのことを考えてみることにします。

先ほど注目の質が変わってきているように思えると言いました。それはマスコミの報道などを見ていて、障害者スポーツに対する固定した見方が崩れつつあるという感覚と言ってもいいかもしれません。

たとえば、車いすバスケットの試合を見ていて、私はこう思います。確かに足や下半身に障害がある選手が車いすを見事に操ってバスケットボールの試合をしている。しかし、この競技は障害ある人々だけが参加することができるスポーツなのだろうか。下半身に障害のない人でも、何らかの形で下半身を固定し、車いすに乗ることができれば、車いすバスケットという競技をすることができるだろうと。

2 ブラインドサッカーの試合を見ていて、私は同じことを思うのです。――

C

そしてこうした思いの先にある問いが、以下のようなものです。

はたして障害者スポーツは障害のある人のためだけのスポーツなのだろうか。身体^{身体}のどの部位に障害があるか、またその程度などで区分けして行われる水泳などの競技は、やはり障害ある人のための競技だと言えるでしょう。

3 私たちがひとくくりにする障害者スポーツは、障害ある人だけのためにという意味で一概ではなく、競技方法の工夫などに由来する違いや個性がさまざまにあります。それゆえ、車いすバスケットは、主に障害ある人々が行う競技であるとしても、障害者バスケットではなく、「車いす」バスケットと私たちは呼んでいますし、ブラインドサッカーも、視覚障害者サッカーではなく、ブラインド、つまり目が見えない状態で行うサッカーと、私たちは呼んでいるのです。

こうした見方は、障害者スポーツをめぐる私たちが持っている「あたりまえ」の知を確実に揺るがすのではないのでしょうか。たとえば私がブラインドサッカーをやるとして、目隠しし、視覚障害がある選手と対等に競技ができるのでしょうか。できないでしょう。上手な選手の足手まといになるのがオチです。視覚が遮られたなかで、周囲の声や音を聞きわけ、状況を瞬時に判断し、次のプレーに移れる能力において、私は視覚障害のある選手からはるかに劣っているからです。

私が上手になるためには、ブラインドであることに④ナれ、ブラインドであるからこそさらに研ぎ澄ませるべき力に気づき、それを鍛えていかなければならないでしょう。つまり、ブラインドサッカーという競技や競技の現実において、「見えること」をめぐる常識や価値はすべて、いったん無効になります。そして、私は「見えない」なかでどのようにプレーができるのかを考えざるを得ないし、「見えないこと」をめぐる常識や価値と向きあわざるを得なくなるのです。

ルールが守られ、厳格な規律が遵守される競技空間で、⑤普段私たちが「あたりまえ」だと思っている支配的な常識や価値が見事に転倒^{転倒}されるのです。そしてこうした転倒が起こることこそ、障害者スポーツがもつもう一つの面白さであり、感動を生みだすものではないでしょうか。

もちろん、私がブラインドサッカーをして、少しばかり上手になったからと言って、視覚障害のある人々の気持ちやより深いところにある思いなどを完璧に了解できるなどとは思わないでしょう。でも障害をめぐるさまざまな決めつけや思いこみが息づいている支配的な常識や価値を「あたりまえ」だと思いこんでいた私の日常に、確実に亀裂^{亀裂}が入るだろうし、私はそのことで障害という「ちがひ」それ自体とよりまっすぐに向きあえるようになるでしょう。そして、「ちがひ」が私の日常にとって、どのような意味や意義をもつかを考えていくた

めの想像力もより豊かになっていくだろうと思うのです。

〈中略〉

私たちは、普段他者と出会う時、その人を瞬時のうちに理解し、どのようにふるまえばいいかを判断しています。そうした判断の背後には他者を理解するために必要な幅広く深い知識の在庫があり、この在庫から、その時その時に「適切」だと思ふ知識を引き出して、他者と向き合っているのです。

とすれば、「ちがひ」ある他者とのように向き合えばいいのでしょうか。まず言えることは、「ちがひ」をめぐる知識の在庫をできるだけ豊かにすることでしょう。薄っぺらな知だけでは、「適切に」向きあうことができないでしょう。従って障害という「ちがひ」に由来する豊かさに触れることはできないだろうし、その豊かさを感じ取る想像力さえも私の中に、育ってることがないからです。

また言えることは、すでにある在庫の知識を常に疑ってかかることの大切さです。4 ブラインドサッカーに実際に参加すれば、視覚障害という「ちがひ」をめぐる私たちの知識の在庫は確実に質量ともに豊かになるはずですが、その結果、「ちがひ」のある他者との出会い方や向きあい方も幅広く豊かに洗練されたものになるでしょう。

私たちの日常的な知識は、常に支配的な価値や支配的なものの見方の影響下にあるものです。そしてたいいの場合、支配的な価値やものの見方に従って暮らした方が楽であり効率がいいとは思いますが、ただ、「ちがひ」のある他者と出会うとき、こうした楽さや効率は、いったんカッコに入れておいた方がいいでしょう。むしろ支配的な価値が障害という「ちがひ」がもつさまざまな新たな意味や創造の可能性を私を感じ取るうえで、まさに「邪魔な障害」となるからです。

そして、一番大事かなと思うのは、「ちがひ」がある他者との出会いで、生じるであろう新たな世界への入り口を見失わないように、私自身が他者を理解するためのセンス、いわば他者への想像力を常に磨いておくことであり、想像力を豊かにしていく楽しさを味わうことだと思います。

「ちがひ」がある他者を差別し排除すること。それは、他者への想像力が劣化した結果生じるのであり、それは他者に深い傷や苦しみを与えるでしょう。でも同時に、それは私自身をも深く傷つけ、ひととしての厚みや豊かさを確実に私から奪っていくのです。

私が豊かに生きることができかどうか。それはまさに私が、「ちがひ」がある他者とうちに出会おうとするのかにかかっているのです。

〈好井裕明著『今、ここ』から考える社会学（ちくまプリマー新書）より〉

◇「障害者」の表記について……人に対して「害」という言葉を使うのはよくないという考えから、「障がい者」、「障がい者」などと書

く場合もありますが、様々な考え方があり、統一されていません。

〔語注〕

※ パラアスリート……パラリンピック（次の注を参照）に出場するスポーツ選手のこと。

※ パラリンピック……障害者を対象とした、世界最大級のスポーツ競技大会。オリンピックと同じ年に、同じ場所で開かれる。

※ 遵守……規則や法律に従って、それを守ること。

問一 ① キンリョク ② 由来 ③ ケントウ ④ ナレ のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 1 4 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア また イ しかし ウ なぜなら エ では オ たとえば

問三 A 注目の質が変わってきている とありますが、これとはほぼ同じ意味で使われている言葉を、本文中から十五字以内でぬき出して書きなさい。

問四

Ｂ そうでないのか。とありますが、「そうでない」場合には、何に感動しているのですか。答えとしてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 障害を持たない者の障害者に対する深い思いやりの心が、障害者スポーツの発展を支えていること。
- イ 障害者スポーツが障害を持たない者にとって、障害という「ちがひ」と向き合うきっかけになること。
- ウ 障害者が多様な障害を持ちながらもそれを乗り越えて、高いレベルでスポーツに取り組んでいること。
- エ スポーツアスリートが障害の有無にかかわらず、競技者として高みを目指してチャレンジし続けること。
- オ これまで報道されることがなかった障害者の活躍が、マスコミの努力によって報道されるようになったこと。

問五

「Ｃ」にはどのような内容の文が入りますか。直前にある「同じこと」の内容を考えて答えなさい。

問六

Ｄ 普段私たちが「あたりまえ」だと思ひこんでいる。とありますが、「私たち」はどのようなことを「あたりまえ」だと思ひているのですか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問七

Ｅ いったんカッコに入れておいた方がいい。とありますが、ここでの「カッコに入れる」の意味としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 強調する
- イ 保留する
- ウ 集積する
- エ 取得する
- オ 持続する

問八

Ｆ 豊かに生きる。とありますが、「豊かに生きる」にはどうすることが必要だと筆者は述べていますか。「知識の在庫」「想像力」という言葉を必ず入れて、六十字程度で答えなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

上野 龍一は弓が丘第一中学校の水泳部員である。幼なじみで水泳部の主将だった月島タケルが昨年交通事故で亡くなつて、タケルを慕っていた部員が次々と退部し、水泳部は「部」から「愛好会」に格下げされそうになっている。

次の場面は、水泳部の顧問（担当の先生）の柳田に、主将代理の龍一が呼び出されたところである。

今回は部室ではなく、職員室への呼び出しだった。

龍一は太股で廊下を歩き、新校舎の一階で一番面積を占めている、職員室の前まで来た。一応ノックをしてから、勢いよく扉を開ける。西日が部室の奥まで差し込み、職員室はムツとするような暑さだった。何人かの教師が下敷きで顔を扇いだりしながら、日誌のようなものを書いてる。

部室の奥の柳田の席を眼で探すと、積み上げられた書類の陰から天然パーマの頭が見えた。柳田は回転椅子に浅く腰掛け、背中を丸めて何かしていた。近づいて見ると、半紙を広げてその上で爪を切っている。その弛緩きつた姿に、龍一は鼻から深く息をついた。

「先生」

声をかけると、柳田は龍一を一瞥し、たちまち「１」に皺を寄せた。

自分で呼び出しておきながら、相変わらず呆れるほどのテンションの低さだった。

「どうだ。諦めはついたか」

テンションは低いくせに、口にする台詞は常に高圧的だ。

「なんですか？」

わざと聞き返した龍一に、「上野、お前なあ……」と柳田は顔を上げかけたが、その先は続けず、再び爪切りに①センネンする。ようやくすべての爪を切り終えた柳田は押し黙っている龍一の前で、掌をぶらぶらと振ってみせた。

「お前は確かに実力があるよ。都大会に出てもきつといい線いくだろう。それに多少部活に精を出したところで、高校に入れないってこともないだろうよ。でもなあ……」

柳田は爪をまとめた半紙を丸めてゴミ箱に②スてながら、再びちらりと龍一の顔を見た。

「それだけじゃ、部活は成立しないんだ」

龍一は黙っていた。

「お前、なんで俺が去年、月島君の要請を受け入れたと思う？」

龍一が答えずにいると、柳田はもつともらしく溜め息をついた。

「月島君には指導力があつたからだ。彼は内申目当ての素人をしっかり選手に育て上げた。水泳の面白さをきちんと伝えた。それに、まあ、月島君に任せておけば、問題は起きないだろうという安心感があつたのも正直なところだ」

聞いていて、龍一はだんだん苛々してきた。

自分はタケルと違う。

そんなことは、自身が一番よく知っている。

そんな分りきつたことを、こんな事なかれ主義なオヤジに今更もったいぶって言われるすじ合いは、どこにもない——

「俺が主将を引き継ぎます。そして選手を育てますよ」

気がつくと思ってもみないことを口にしていた。

柳田は意外そうに龍一を見返したが、すぐにその口元に皮肉な笑みを浮かべた。

「まあ上野、そう意地になるな。運動部の主将はややこしいぞ。部として残すとなると、夏の強化練習だの、学区域内の親善試合だの、そんなものまでやらなきゃならん。正直に言うけど、俺はこの学校の水泳愛好会が、部になるなんて思ってもみなかったんだ。そんなことが分かっていたら、端から顧問を引き受けなかった。つまりだな……。俺もお前も忙しい身だ。ここは一つ、^A適当なところで手を打とう。都大会に出たいだけなら、他にも方法はあるだろう。それについては多少の協力をしてやった方がいいぞ」

柳田のあまりに明け透けな物言いに、^B龍一は怯んだ。

だが——。柳田の言うとおりだ。

これ以上意地を張るのはやめて、この辺で《2》を引いておいたほうが身のためだ。

他の部員たちには「顧問が認めてくれなかった」と言い訳して、後は二年生に任せてしまおう。愛好会なら残った連中でもどうにかでき

るはずだ。そうなったときに敦子がどうするかは、もう知ったことではない。

しかし。

「無理するな、お前は月島君にはなれないよ」

たいした気もなく呟かれた囁きを、龍一は聞いてしまった。

^Cその途端、何かはちきれそうになった。

タケルが突然いなくなった理不尽。

主力だった二年生が、立ち去る際に見せた厭味な態度。「そうそう」と^③共鳴しあう、他力本願な相槌。ぞろぞろと連れ立って部室を出ていった足音。

敦子がしつこく腕に巻き続けている喪章。

〈中略〉

瞬間、龍一は急激に逆らいたくなくなった。

^D自分を巻きにくる長いものに、力いっぱい逆らいたくなくなった。

そうしないと……、本当に《3》が詰まってしまうそうだった。

「いや、やっぱり俺が水泳部を引き継ぎます」

「やめとけ、やめとけ。どうせお前の望みは都大会だろう。それなら他の手を考えてやる。今残ってる連中には何の大会実績もないんだ。どだい、来月の都大会申請には間に合わない」

「弓が丘杯ならどうですか？」

思わず言ってしまったから、龍一自身が自分の言葉に驚いた。

公式戦でない、ローカル大会など意味がない。

そう思っていたのは、他でもない自分自身だ。

だが、まるで誰かに導かれるように、言葉が自然と口からこぼれおちていった。

「弓が丘杯なら制限タイムがありません。後輩たちも出場できます。俺の個人競技じゃなくて、皆で力を合わせてメドレーリレーに出場し

ます」

きつぱりと言いつつ龍一に、柳田は呆氣にとられた。

「昨年この大会で、月島がメドレーリレーのトロフィーを持ち帰っています。俺もそれを目指します。それなら文句ないですよ、先生」
重ねて龍一がそう言うのと、柳田の表情が固まった。

やがてその顔に、じわじわと不快感がにじみ出す。

普段無気力な柳田が、今まで見せたことのないような陰阻な表情を浮かべたことに、龍一は少しだけたじろいだ。

「いいだろう」

次に柳田は、不敵な笑みを湛えて龍一を睨み据えていた。

「そこまで言うなら、今のところ降格は見送ってやる。だが自分の言った言葉に責任を持てよ、上野。きつちりと主将を務めて、本当に、リレーで弓が丘杯に出場してトロフィーをとってみせろ。いいな、お前から言い出したことだ。」
E
それが存続の条件だ」

柳田は、本気で龍一の意固地を嫌悪しているようだった。

「分かりました」

だが龍一も負けてはいなかった。ここで引いたら、自分は本当に戻れない。そんな気がした。

職員室を出たとき、龍一は意外にも、それほど後悔していなかった。

狙うなら、弓が丘杯だと思っけど――。

敦子に言われたその言葉が、自分の心の片隅のどこかにも引っかかっていたのだろうか。皆が出られる大会。そこに、本当に意味はあるのだろうか。

その答えを探すためにも、戻らなくては……。

ふいにそう思った。

皆が待つてる部屋に戻るんだ――。

龍一は、西棟の木造校舎へと足を向けた。

〈古内一絵著『快晴フライング』（ポプラ社）より。〉

〔語注〕

※ 弛緩……………ゆるむこと。たるむこと。だらけること。

※ 一瞥……………ちらりと見ること。

※ 都大会……………東京都選手権大会の略。全国大会にまでつながる公式戦。龍一は昨年、個人戦で都大会に出場している。

※ 内申……………内申書。進学などの際に提出する、その生徒の成績・人物などについての報告書。

※ 事なかれ主義……………何も変わったことが起こらず、平穩無事にすむことを望む、消極的な考え方。

※ 敦子……………龍一とタケルの幼なじみで、水泳部三年生の主力選手。

※ 他力本願……………他人まかせで自分は何もやらないこと。他人の力や助力をあてにすること。

※ 喪章……………人の死を悲しみ惜しむ気持ちを表わすためにつける黒い布、リボン。

※ 弓が丘杯……………弓が丘第一中学校のある弓が丘市の水泳大会。公式戦ではなく、市民のお祭のような地元の大会。

※ 陰阻……………けわしいこと。

問一 ① センネン ② スて ③ 共鳴 のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 〈1〉 〈3〉 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか使わないこととします。

ア 目尻 イ 手 ウ 口 エ 息 オ 眉間

問三 A 適当なところで手を打とう。とありますが、顧問の「柳田」は具体的にはどうすることを提案していますか。「水泳部」「都大会」という言葉を使って説明しなさい。

問四 B 龍一は怯んだ。とありますが、「怯む」とは「相手の勢いにおされて気力がくじける」という意味です。「怯んだ」と同じ意味で

使われている言葉を本文中から五字でぬき出して書きなさい。

問五 C その途端、何かがはちきれそうになった。とありますが、この表現から、「龍一」が「タケル」をどのように思っていたことがわ

かりますか。説明しなさい。

問六 D 自分を巻きにくる長いものとは、こういうことを指しますか。答えとしてふさわしくないものを、次のア～オの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 「敦子」が「タケル」の死を忘れられないでいること。

イ 「タケル」が突然の事故で死んでしまったこと。

ウ 学校が水泳部の活躍を期待していること。

エ 主力だった二年生が相次いで退部したこと。

オ 顧問の「柳田」が何度も「龍一」を説得してきたこと。

問七 E それが存続の条件だ。とありますが、「それ」とはどのようなことですか。説明しなさい。

問八 顧問の「柳田」とのやりとりを通して、「龍一」の大会出場に対する思いはどのように変化しましたか。本文全体から読み取って答えなさい。

[illegible]

採点欄
解答を記入
しないで下さい

問二	
1	
2	
3	
4	

問三

問四

15

問五

問六

問七

[illegible]

問 一	問 一	二
1	①	セン ネン
2	②	ス
3	③	て 共 鳴

問三

問四

問五

問六

問七

問八